

佳作

祈りの機械

.txt

岡田岳陽

A1 庭

赤色とか黄色とか、ピンク色とか白とか青とか、名前の解らない花が沢山咲き乱れている。ひび割れた石畳からは下草が旺盛に丈を伸ばして、日の光が木々の梢にさんざめく。荒れ放題に荒れた教会の庭先で、小さな裁判が始まる。

「どうしてあんたは、彼女を殺してしまったの？」

黒猫のトイは可愛い声をしている。

「私は人殺しなんかしていないわ」

私は機械の声で答える。確かに殺人の覚えなど私にはないのだけれど、困ったことに死体はあって、容疑者は人形の私と黒猫のトイ、二人と呼ぶには少し可笑しい二体だけ。黒猫のトイには、彼女の首を締め上げて、体を引きちぎるような膂力りきりよくは期待できないから、当然のごとく怪しいのは私一人ということになる。

「死体がある以上は法を適用する必要があるの。人を殺した人形は壊されなければいけない。不良品のアンドロイドを放って置くわけにはいかないから」

「それならトイ、現場検証をしましょう」

教会の戸を開ける。重たい木戸がギイギイ軋んで、一歩踏み

入れると途端に空気が冷たい。分厚い石壁が温度を閉め出して

いるのだろう、ステンドグラスから入ってくる薄明かりには、

生命力が足りない。静止した水面のような、よく磨かれた床と、

説教台に向かって並んだ木のベンチ。

——少し昔には、こういった場所に大勢の人が座って、一緒に

祈ったのよ

今は物を言わなくなってしまった、彼女の声を思い出す。心

の隙間に沁みるような優しい声をしていた。

説教台の裏側に回ると、バラバラになった体があった。首と腕と腕と足と足があって、少し離れたところに胴体がある。それぞれのパーツは乱暴に引きちぎられて、断面からは赤色とか青色とか、糸のようなものがはみ出ている。胴体の損傷は特に酷くて、内臓を抉り出したような、そんな跡がある。破られた胸郭の中には、何かを持ち去られたのか、致命的な空白がある。暗闇がポツカリと口を開けて、私の意識を吸い込もうとする。

私は目を逸らす、両膝を折って座り込みたい衝動を抑え込む。

「これを見ても、なんとも思わないの？」

説教台の上に跳び乗ったトイが言う。

「なんとも思わないわけ、ないじゃない」

「これが人間だったなら、吐き気を催して立っていられない光景よ」

「食べる機能がないんだもの、吐き気なんて知らないわ」

私は説教台から離れて、最前列のベンチにドサリと腰掛けた。

「それでも傷ついているって、証明する方法が欲しいの。食べる、食べること。そうね、最初から話をしましょう。私が彼女と初めて会った日、彼女は一緒に食事をしましょうって言ったの」

B1 食べる

教会の庭には色々な色をした花が咲き乱れていて、私はずっと、待っていた。待つというのは辛いことで、来るはずだと知ってはいても、時計の針が進む度、ちょっとずつ不安になる。来てくれなかったらどうしよう。本当に怖いことは、誰も来ないことではなくて、誰かが来るかもしれないと思っていることだ。そんな風に信じている限り、私は待ち続けることを止められない。

そんなことを考えてしまうほどに、たった十分の遅刻を長く感じた。

彼女は月のような目をした黒猫と、白熊のような犬を連れていた。

「これからよろしくね、ナナ」

と彼女は私の名を呼ぶ。

続いて犬が朗らかな老人の声で名乗る。

「僕はパブプロフと言います」

黒猫は名乗らずに、彼女の陰に隠れるようにして注意深い目をこちらに向けている。

「こら、キイ、ちゃんと自己紹介しなきゃ駄目でしょう」

彼女がたしなめると、

「だって不気味よ、こんな機械。陶器みたいな肌をしているくせに、硝子の目なんか変にキラキラして」

可愛い声でそう言い捨てると、キイは流れるような動きで走り出して、私の傍を駆け抜け、教会の陰に消えた。

「猫というのは、まるで風のように走るんですね」

私が言うと、

「ここにも風は吹くの？」

彼女は首を傾げる。

「髪を揺らす微風も、梢を騒がす大風もあります」

「あなたは自然の風を知っているの？」

「いいえ、私はここであなたの身の回りの世話と、話し相手になるために作られました。ですから、ここ以外の場所のことは解りません。しかし、ここにあるものは、自然にある物と見分けがつかないように作られていると伺いました。日光だって綺麗な色をしているでしょう？」

「見た目は同じでも、自然の日光はもっと肌に悪いものなの。長いこと浴びてると、肌が赤くなったり、シミが出来たり」

「存じています。この照明は一定以上のエネルギーをもった波長帯は遮蔽するようにできています。あなたの綺麗な肌を

傷つけてはいけませんから」

彼女は少し俯くように私から目を逸らすと、

「そういうことが言いたいわけじゃないの」

暗い声で言ってから、

「ごめんなさい、変な話をしてしまった。ねえ、キイは風のよ
うに走るけどね、パプロフだって走るときは風になるんだよ」

取り繕ったような明るい声でそう言って、

「キイを探してくる」

と彼女は黒猫の消えた方へと歩いて行った。

彼女が教会の建物を回って見えなくなってからパプロフが小
声で、

「儂が風になれたというのも、もう昔の話です。ご主人のこと
を頼みますよ。ここに用意されたのがお前さんという機械であ
るのも、そういう訳ですから。儂とキイがここにいられるのは、
過ぎてしまえば一瞬の間に過ぎないでしょう」

「大丈夫ですよ。私はその為に作られてここに置かれたのです
から。彼女を支えるために私はいるのです」

「だからこそ、不安になるといふこともあるのですよ。常に好
意を向けられていたとして、それがつまりはそういう風に作ら
れた機械から向けられている、ということが虚しくなってしまう
瞬間があるはずですよ。そもそも、作られた好意と、装われた
好意と、虚しさという意味では同じことです」

「あなたと私と、きつとそんなに違いはありませんよ。私は確
かに、彼女を好きになるように、献身するようにとできていま

すが、それは犬のあなただつて同じです。あなたはご主人を好
きになるように、慮るようにと命ずる本能を持っています」

「それは彼女にとつてはきつと違うことだ」

「違うというのは悪いことですか？」

私の問いかけには答えずパプロフは歩き出した。

「さあ、ご主人とキイを探しに行きましょう。あれはかくれん
ぼの名人ですよ」

彼女と私とパプロフとで黒猫を探したけれど、茂みを覗き込
んでも、枝葉の陰を見上げても、キイの姿は見つからない。

「パプロフ、匂いで探せない？」

「上の方にいますなあ」

と言つて鼻先を教会の屋根に向ける。傍らの木から枝を伝つ
て、屋根に渡つたのだろうか。

「それなら、先にご飯にしましょう。ナナ、食料庫に案内して
くれる？」

と彼女が言った。

食料庫は教会とは別棟、生活棟の地下にあり、庭にある小さ
な小屋から階段を下つて入るようになっていた。電灯やコン
ピュータといった近代的なものを極力排した地上部と違って、
地下の倉庫には温湿度管理や残量管理、発電量の監視など、こ
この維持に必要な機能が集約されている。パプロフは階段を
嫌つて地上に残り、私と彼女の二人が倉庫の戸を開けて踏み込
むと、手前から奥へと向けて天井の白色灯が順に点いて、ずら
りと並んだスチールラックと段ボールが現れた。

足を踏み入れるのは初めてだったけれど、どこに何があるのかは全て記憶装置に記憶しており、在庫状況に関する記憶も倉庫のシステムと同期するようになっていた。

ほとんどは人間向けの雑貨類で、右側の壁際には犬と猫の餌やトイレ用の砂がある。

部屋の奥行きは案外狭くて、すぐに壁へと突き当たる。壁についた扉の向こうは彼女の為の食料が貯蔵された冷蔵庫・冷凍庫になっている。

彼女を案内しながら倉庫をグルリと回り、倉庫の左奥、さらに地下へと降りる階段を行こうとする私の肩に彼女は手を置いた。

「そっちはまだいいわ。案内ありがとうございます」

「しかし、早い内に案内するようにと命令があります」

「何があるのかは知っているから、今はいい。そんなに急いでやりたくはないの」

「解りました」

「ごめんね、我が儘言ってます。さあ、パプロフとキイのご飯を持って行ってあげましょう。私の分はその後で」

私がドッグフードとキャットフードの袋を両方抱えると、彼女は驚いた顔をした。

「あなた、力持ちなのね。そんな細い腕をして。でも、一個は私に持たせて。あなたの体格でそんな、胴体よりも太い袋を二つも持つてると危なっかしくなって」

「私はそのための機械です。あなたに荷物を持たせるのは……」

「一個持つて貰えるだけで充分助かるわ」

彼女は無理矢理袋を持つて行くと、フラフラと重心を揺らしながら階段を昇った。私は彼女がバランスを崩したときに、すぐに支えられるようにと身構えながら背中を追った。単に荷物を二つ持つて歩くよりも余程、神経を使ったけれど、不思議なことにその面倒が嫌ではなかった。

「おい、パプロフ」

彼女が声を挙げて呼んでも、あの白い犬は現れなかった。

「おかしいなあ、いつもは私のそばを離れないし、呼んだら走ってくるのに。パプロフ、パーブローフ」

何回呼んでも来ないので、彼女は私にキイの分の餌を量って渡して、その皿を適当なところにおいて、離れたところで待つようにと言った。

「あの子は怖がりだから、驚かさないうであげてね。私が初めてあの子にご飯をあげたときもね、ご飯を置いてもベッドの下に潜ったまま出てこなくて。私が部屋の反対側に座って寝たふりを始めるまで出てこなかったのよ」

「可愛いでしょ」と彼女は笑って、「パプロフを探してくるわ」と犬の餌を一皿持つて行った。

残された私は、教会の軒下に猫用のフレックが入った青い陶器の皿を置いて、教会の建物から離れて外周を囲う塀に寄りかかった。

てつきり教会の屋根の方から来るものだと思っていたので、頭上から声が聞こえたときは驚いた。

「全く、全部聞こえてるのよ。怖がりだなんて失礼ね。用心深いだけよ、猫ってそういう生き物なんだから」

四本の足を器用に扉の上のっけていたキイは、そのままバネのように跳躍すると私の頭を飛び越して数歩先の地面に着地し、皿のそばへと走った。クルリと首だけをこちらに回して、縦長の瞳でこちらを睨むと、

「動くんじゃないわよ、機械人形。あんたが無害なのは知ってるけど、動く音が不快なの」

それだけ言って餌を食べ始める。黒い尻尾が垂直にピンと伸びて、カリカリと餌を食む動きに合わせて揺れる。

「モーターの音が不快なのですか？」

黒猫は私の問いかけを無視してしばらく餌を食べ続け、半分ほど食べたところで思い出したように答えた。

「聞き慣れない音が不快なの」

言うが早いか、また続きを食べ始める。

「それならば、私は寧ろ動き回って、あなたに慣れてもらいたいです」

今度は皿が空っぽになるまで待たされて、ようやく返事があつた。

「そういうのって、時間がかかるのよ」

キイはその場に座り込み、食後の顔洗いを始めた。不器用に丸めた前肢を舐めては、尖った耳から小さな額にかけてまで下ろす。ひとしきり満足するまで顔を洗ってから、

「もう動いていいわよ機械人形、あたしの用事はすんだから」

上機嫌で言い残して、木の幹を器用に駆け上ると教会の屋根へと消えた。

一度地下に降り、彼女の食事を用意して戻ってくると、空になった餌皿を持った彼女がいた。パプロフは墓石広場にいたという。

生活棟一階の食堂には木で出来た四角い机と椅子が二脚あり、一人分のパンとスープが卓上に置かれた。石壁に四角く切り取られた窓から作り物の日光が差し込む。

「パプロフとキイのお皿を洗ってきます」

そう言って台所に向かおうとした私の腕を彼女は掴んだ。

「洗い物なんて後にして、一緒に食事をしましょう？」

「しかし、私には食べる機能はありません」

「まるで人間みたいな目も口も耳も鼻もあつて、まるで人間みたいに服を着ているのに、食事はしないの？」

「日に一時間の充電が私の食事です」

「そうなの……でも、ねえ、そこに座って食事の間、話し相手になつてくれない？ 洗い物も一緒にやりましょう」

私が彼女の向かいに腰掛けると、彼女は胸元から統一教のシンボルを取り出す。真鍮製の円に内接するように沢山の正方形が少しずつずらされて重なり、正方形一つ一つの辺を接線として内側にはもう一つ、小さな円が象られる。

彼女は細い指を組んで、シンボルを掌に閉じ込めると祈りの姿勢をとる。私も彼女に合わせて祈りの姿勢をとると、

「あなたも祈るの？」

彼女が首を傾げた。

「はい、統一教の教義や儀式について一通りの記憶はインストールされています。あなたは人類最期の祈りを捧げる人で、ここはその為の場所です。そうして私は、この場所の一部です」

「それなら祈りの文句も解るのね」

彼女はそう言って目を瞑り、組んだ両手を額につけると小さく、しかしハッキリとした声で祈りを唱えた。

「造物主よ、世界は主によって生まれ、私は主によって世界に生まれ、主によって生み出された恵みを得て長らえます。願わくはこの祈りが主の救いを近づけることを」

そのまま十秒ほど黙祷して彼女は手を解き、首飾りを胸元に仕舞う。

パンを食む音と、スープを掬うスプーンのカチャカチャという音だけがしばらく続いた。

「なんだか今日は、食べているところを眺める日のような気がします」

「やっぱり、見ているだけは退屈？ ごめんなさい、待たせてしまつて」

彼女が申し訳なきような顔をするので私は慌てて、

「いいえ、決してそんなことはありませんよ。ただ——」

「ただ？」

「来ない人を待つことだけは、辛いと思います。あなたが来る前の十分ほどに長い時間は、きっともうないでしょう。なんといつても、目の前にあなたはもういますから」

「あなたは どうしてそんなに私のことを？」

「私はあなたの為に作られて、ここに置かれたのですから」

私がそう言うと、彼女はこちらに向けていた視線を手元に落として、スプーンでスープをかき混ぜた。物憂い表情をしているように見えたので、

「どうかしましたか？」

と尋ねると、

「悲しいなって思ったの」

その言葉を聞いた私は、どうしてかとても悪いことをしたような気になって、

「それは私の言葉のせいでしょうか？」

彼女はゆるゆると首を振った。

「いいえ、あなたのせいじゃないのよ。あなたの言葉は嬉しい。ただ、あなたがそんな風に言うことが、どうしてか悲しいの」

それから彼女は無言で食事を続けた。

A2 月

黒猫のトイと思い出話をするうちに日は暮れて、教会の中はすっかり暗くなった。灯りと言えば窓から射す青い月光だけ。カメラの感度を最大まであげると、ノイズの中に説教台が輪郭を現す。その裏側に彼女だった物が散らばっているのだと考え、胸が苦しくなる。

「ここにいるのは辛いわトイ、一度外にいきましょう」

「機械人形が辛いだなんて、変なことを言うのね。これだってあんたがやったことじゃないの」

そう言いながら黒猫は扉の隙間を抜けて月明かりの下へと出ていく。振り返った目は瞳孔が開いてまん丸になっている。私も後を追って庭に出る。

空には人面の月が浮かんで、口元にニヤリとチエシヤ猫のような笑いを浮かべている。

「あんな月の出てくる映画を見たことあるわ、彼女と一緒に」

生活棟二階の寝室には小さなテレビがあつて、データベースに登録された映画を見られるようになっていた。彼女に課せられていた日課と言えば、日に二回、食前の祈りと、その他に三回、決まった時刻に教会の決まった場所で祈ることだけだったから、時間は沢山あつたのだ。

——とても古い映画なのよ

彼女の言う通り、あれは古い映画だった。全部で十五分もない短い映画。

初めはどこかの天文台か、大学の講義室のような書き割りを前に、大勢の三角帽子が騒いでいるシーンから始まる。そこにひげもじやの男が現れて、黒板に大砲の絵を描く。大きな大砲を作つて、ロケットを飛ばして月を目指そうと言うのだ。そのロケットもとい砲弾が、人面の月に突き刺さるシーンはそれなりに有名だったのだという。

音楽は別録りで台詞は一切なく、全編を通して固定されたカメラの前で書き割りを背景に、大勢の人間が騒がしく動いてい

るだけで、技術的にはもつと新しい他の映画に比べれば随分と見劣りしたけれど、彼女はそれを繰り返し見た。彼女が繰り返し見たので、私も当然のように何回も見ることになった。

——あなたはこの映画のことが好き？

勿論好きだと答えたら、この映画のどこが好きなのかと訊かれた。その質問をされるのは二回目で、前の時には「あなたの好きな映画だから」と答えたところ彼女は黙り込んでしまつて、次の日まで口をきいてくれなかった。なので、そのときの私は別の答えを探さなければいけなかつた。

「やっぱり、月に砲弾の刺さるシーンが好きです。それまでにやけていた顔に砲弾が刺さつて、変な液体が流れてきて表情も歪んで、見えていて少し苦しいはずなのに、繰り返し見たくなります。それから、博士達が帰ってきた後のパレードに、宇宙人が一人紛れ込んでしまつている場面も。月にやつてきた異邦人を追いかけていたらしいの間にか自分が独り異邦人になつていた。賑やかなシーンのはずなのに彼だけが浮いて見えます」

私が一通りの感想を述べてみると、彼女は

「私も同じ所が好き」

と言つて嬉しそうに笑つた。

それから映画を見たときにはいつも感想を求められた。私と彼女の意見は一致するときもあればそうでないときもあつた。彼女の嫌嫌はその時々で変わったけれど、私はただ彼女と話をしていることがいつも楽しかつた。

——でもね、少し悪趣味だとも思うの

題名は忘れてしまったけれど、とても悲しい映画を見たときに、彼女がそんなことを言い出したことがある。

「映画でも小説でも、悲しい話ってとても多いのよ。人間って悲劇が好きなき物なの。口では人の不幸なんて見たくないって言いながら、それが虚構の世界のことなら喜んで見に行つて、涙の味に酔うのよ。悲劇は美しいけれど、それを美しいと感じる人間の心は酷く醜いと思わない？」

彼女は私の目をじっと見つめて瞬きをする、静かな瞳の上を薄い瞼が滑った。

「そんなに苦しそうな顔をしないでください」

そう言いながら、私は彼女のそんな顔をもう少し長く見たいと思つていた。救いを求めるような彼女の表情をととても綺麗だと感じて、そんな彼女を慰められる立場に自分のいることが嬉しいと思つた。彼女の言っていることはきつと、そういうことなのだろう。

「私もきつと、同じですから」

「あの映画には言葉がなかったわね」

トイの声で思い出から引き戻された。

「初めの頃の映画には声がなかったのよ、不思議だと思わない？言葉を持たない画面の中に人間の絵があつて、そこにはちゃんと描かれたとおりの人間がいると感じられることが」月を見上げながら黒猫は言う。「ねえ知ってる？ 登場人物やキャラクターと呼ばれるものには、内面なんて存在しないのよ。それは

映画が声を持つようになつても変わらない」

「どうしてそんなことを言うの？ 画面の中でも言葉の中でも、人が笑つていれば嬉しくなるし、泣いていれば悲しくなるのに」

「共感って言うのはね、相手に内面があるかどうかなんて関係ないのよ。だつて心は目に見えないんだもの。心は耳に聞こえないし、手に触れられない、匂いもなければ温度もない。だから共感って言うのは目に見えるもの聞こえるもの、表情や言葉や行動の総体から、それらを引き起こしている心の状態を推測する機能のこと。だから、心があるかのようにふるまう物体があれば、人間はそこに心を見いだしてしまう。それらは作り物の映像や、言葉に過ぎないというのに」

トイが尻尾をパタリと振ると、遠くから大砲の砲撃音が聞こえて月の顔に砲弾が刺さる。流れ出した白い液体がぼたりと庭の枯れ木に落ちて、まるでペンキが飛び散つた跡のように白くなる。

「そんなことを言うなら、人は、私はどうやって自分の心を伝えればいいの？」

「そんなことは不可能よ。特にあなたの言葉なんか、いくら重ねたところで心のないところに言葉の存在するという証明にしかない」

黒猫は立ち上がつて伸びをする。

「いいわ、少し説明してあげる。そもそも喋る機械自体、その為が開発が始められたようなものなんだから。人間の記録の中に、ある時点から喋る動物が出てくるようになったの。それは

人間の心が脳ではなくて心臓にあると信じられているような大昔からだったから、時代が進むまでは誰も疑問に思わなかった。人間が心臓から言葉を生むなら、犬や猫や魚や鳥が心臓から言葉を生んでも不思議はない。けれど、科学が発展するにつれて、心臓には言葉を生むような複雑な機能はなくて、人間の感情や意思は脳から生まれるのだと考えられるようになった。

科学者達は困ったわ。だって、人間ほどの規模をもった巨大な脳みそを持つてようやく可能になるはずの言語という機能が、より小さくて単純な機能しか持たないはずの犬や猫の脳から生まれていることになってしまふ。とりもなおさず喋る動物たちと、喋らない動物たちの脳を解剖して見ても違いは見つからなくて、喋る生き物を解剖した学者は非人道的な実験のせいで学会から追放されてしまった」

「それがどうして喋る機械に繋がるの？」

「言葉があるからと言って、心があるとは限らない、心を持つのは人間のみで動物たちが喋るのは何らかの方法で言葉という機能を機械的に模倣しているに過ぎないのだ。そういう証明を試みた集団がいたの。」

心は超越者による被造物であり、人工物に宿ることはあり得ない。だから究極的にはAND・OR・NOTの三つの論理素子にまで分解できる純粋な機械がまるで心を持つかのように喋れば、それは言葉のあるところに心の存在しない場合があると言ふ証明になるのだと考えた。

必要な前提は二つ。一つ、造物主に拠らない被造物は心を持

たない。二つ、造物主に拠らない被造物が言葉を操る。従って、心のないところにも言葉は存在しうる。どう？ 綺麗な論理でしよう」

私は指を組んだり解いたりしながらトイの言葉を整理する。足のつま先でトントンと地面を叩いてみる。やわらかな黒い土がへこむ。

「ねえ待って、心が超越者の被造物だと誰が証明したの？ 造物主の存在なんて、証明した人は誰もいないのに」

「確かに神やそれに類する存在を観測して、証明した人間はいないわ。でもね、反証もされていないのよ。数々の物理法則の発見が行ったのは、創世の仕組みを説明するのに超越者の存在が必要ないという証明だけ。必要ないからと言って、存在しないとは限らない」

「それなら。例え言葉の存在に心は必要ないのだとしても、心の不在証明にはならないでしょ？ 誰も見たことがない造物主なんかよりも、ここに感じられる心の方がもっと確かなものはずよ」

「あなたの心だって、誰も見たことがないのよ。物理的に観測できるのはあなたの回路を流れる電流と、あなたの言葉と、あなたの動きだけ」

「そんなのは人間だって同じことよ、人間の心だって物理的には神経細胞を流れる電気信号に過ぎない」

「そう、その通り。人間は誰だって『嬉しい』や『悲しい』を胸の中に抱えているのに、それらを感じる心を持っていると証

明することは少なくとも言葉を使った方法では不可能なの。自分の心だけがありありと感じられて、他者に向かつては決して確かな形で証明できない。自分の心の在処を証明する言葉を誰も持っていないの」

「それでも、私はここにいるのよ。彼女だって確かにいたはずなの」

「それはただの信仰よ、心があるはずだという信念は証明不可能で、それでいて人間には疑い得ない一つの公理。あんたが心の実在を主張する限り、神の実在を信じた人間を責める権利はどこにもない。だってあんたも彼らも証明できない何かを信じているだけなんだから」

トイはそこまで喋ると立ち上がった。塀に向かい、体を縮めてお尻を二回ほど左右に振ると跳び上がって塀の上に立つ。それから唐突に香箱座りをして目を瞑る。

「難しい話をしてたら眠くなったわ」

そうやってそのまま眠ろうとする。

「今は夜よ、猫は昼間寝て夜に起きる生き物だと聞いたのだけだ」

「大体の所はあつてるけど、間違っているところがあるわね。」

猫って言うのは、眠いときに寝て、起きたいときに起きるのよ」

そうやって、何も言わなくなる。

私はトイが起きるまでの間、散歩に出ることにした。教会の正面、門を潜って塀の外に出る。彼女は塀の外の光景を嫌ってあまり出てこなかったけれど、彼女が眠っている間、私は頻繁

に門を潜った。日に八時間の睡眠を必要とする人間と違って、私は一時間の充電と同時にスリープに突入して内部のデータ整理を行うだけですむ。

だから塀の外、墓石広場の記憶は大抵が一人の記憶のだけれど、彼女と一緒に歩いたことが一度だけある。あれはパプロフの埋葬の時だった。

B2 眠る

彼女が眠りにつくまで、隣に座っているのが日課になっていた。

それは彼女が来てから一月ほど経つ頃に彼女が言い出したことで、暗い部屋に一人でいたくないのだという。ベッドに入る、布団を被って目を瞑る。そうすると周りの空間が途端に茫漠としたものに感じられて、地上にたった一人で取り残されたような気になる。部屋の四隅に溜まった暗闇に掴まれて、決して明けることのない夜に囚われてしまう、そんな想像をしてしまうのだと彼女は言った。

私は彼女の眠った横に腰掛けて、彼女が寝入るのを待った。

「ナナ、ちゃんとそこにいる？」

目を瞑ったまま彼女が問いかけるので、

「はい、いますよ」

と答える。

「ありがと。これで少し、寂しくない」

それから暫く経って、彼女はパチリと目を開いた。

「ねえナナ、本当にここの外には、人間は誰もいなくなっちゃったの？」

私は答えずに窮した。シェルターの外の観測データをこの場所のシステムを通じて知らされているけれど、あらゆる数値が人間の生存を拒んでいるなどと言うのはどうしても躊躇われた。それで、

「あなたは一人ではありませんよ。ここにはキイもパブロフも、私もありますから」

気休めを言った。彼女は、そうね、とは言わずに一言、「ありがとう」

私に背を向けるように寝転ぶと、頭から布団を被った。押し殺した泣き声が聞こえて、細かい体の震えがベッドを通して伝わってきた。

「何も言わずに傍にいて、お願い」

彼女が言うので、私は伸ばしかけた手を引つ込めて、じつと彼女が眠りにつくのを待った。やわらかな寝息が聞こえ始めた時、少し安心した。眠っている人間は泣かないですむのだから。それから私は部屋のコンセントに電源コードを接続して一時間のスリープに入った。

夜が長いと言うことに気が付いたのは目覚めてすぐのことだった。彼女の起きる時間まではまだ六時間ほどある。それまでの夜はスリープから目覚めたまま何も考えずに教会の中に座っていれば明けたはずなのに、空っぽにしようとするそばか

ら頭の中に何かが浮かぶ。

彼女は綺麗に目を瞑っていて、穏やかに寝息を立てている。時折、寝返りを打ってはムニヤムニヤと寝言になりかけたような声を出す。

私はついつい待ってしまうのだった。彼女が目を覚まして、また話しかけてくれる時間を今か今かと確認してしまう。それでいつまで経っても一時間すら過ぎてはくれないので、耐えかねて部屋の外へと出てしまった。

気を紛らわせるために外へ出たはずなのに、どこに行っても落ち着くことができなかった。昼間は擬似日光を乱反射していた茂みは隙間に闇を吸って膨張して、立ち木は骨張った手のような影になっている。何を見ても昼間、明るい光の中に彼女がいた場所とは思えず、とても余所余所しい場所のように感じた。夜というのは暗くて寂しくて、長い時間なのだと初めて学んだ私は、逃げるように門から塀の外に出た。

教会はシェルターの中心にあつて、その周囲はずつと墓石ばかり立ち並んでいる。ドームに投影された星空を、墓石の幾何学が黒く切り取っている。死体が埋まっているわけではないけれど、墓石の一つ一つには人間の名前が百ずつ刻まれている。限られた空間に彫れるだけの名前ばかりが整然と並んで、人間の墓場なのだとされた。

彼女はこの景色を嫌って外に出たがらなかったから、私もまた外に出たことはなかった。その景色の中にあつてようやく、昼間の光景を思い出したり重ねたりしなですむ場所を見つけ

た。

その日から、彼女が寝入るまで傍にいて、充電時間の後は墓石広場に出て過ごすようになった。彼女が起きるきつかり一時間前には戻って、朝を迎えた。

そんな日課の中で何回か、キイに出くわしたことがある。

「こんな夜中に何してるのよ機械人形、墓石なんかやたらと眺め回して」

そんな声が頭の真上から聞こえたので驚いて顔を上げてみると、私の眺めていた墓石のすぐ上に、黒猫が立っているのだった。

「彼女の名前を探しているんですよ」

「不気味なことをしてるわね。そんなもの探してどうするって言うの？」

「彼女の名前がないことを確かめて安心するんですよ」

「これだけ沢山、それこそ地上の全ての名前を刻めるだけの墓石があるんだから、彼女の名前なんかあったとしてもそうそう簡単には見つからないわよ」

「ええ、だから毎日少しずつ安心していくんですよ」

「同姓同名だって、きつとあるはずよ。名前の有無と彼女の間には関係なんてないわ」

「それは知っていますけど、そうやって割り切れる話でもないんです」

「まあ、好きにすればいいけどね」

そいつってキイは墓石から飛び降りるとどこかへと走って行

く。あの気まぐれな生き物がご飯の時間以外どこに行っているのかは、飼い主ですらよく知らない。時折、彼女が座っているときに膝の上へと眠りに来ることもある位で、その他はいつだって一匹でどこかを歩いているのだ。

彼女は朝に起き出して、日に二回の食事と、三回の祈りの日課をこなす。その合間に映画を見たり本を読んだり、会話をしたりして、夜に眠る。

そんな変わり映えのしない日々が一年ほど過ぎる内にパプロフは少しずつ弱っていた。

パプロフと私の間には、意外なほど接点がなかった。彼女とパプロフが一緒にいる光景というのはよく見たのだけれど、そんな時は彼女らの間に自分が入り込む隙間のないように感じてしまつて話しかけには行かなかつたし、私が彼女の傍にいるときパプロフがやってくることもまた殆どなかった。

初めのうちは露骨に私を避けていたキイの方が、今ではよっぽどよく会話をするようになっていた位なので、当然のごとくパプロフが弱つていることに気が付くのは遅くなった。

弱つていると知ったのは、庭のダストシートで彼女がパプロフのご飯を捨てている所を見たときだ。

「どうしたんですか？」

「パプロフがまたご飯を食べないの。ほら、あの子最近元気がいでしょう。前にも一度、こんな風にご飯を食べなくなつたことがあったから、大丈夫だと思うんだけどね」

そう言つて笑顔を繕おうとする彼女は、とても憔悴した表情をしていた。

「申し訳ありません、私にもこの場所にも獣医学分野のデータベースがないので——」

私の言葉を途中で遮つて彼女は、

「いいのよ。あの子ももう結構な年だから、覚悟はしているの。どんなに先延ばししても、いつかは避けられないことだから」

そう言つて犬小屋の方へ歩き出した彼女は立ち止まって、

「ねえ、これから暫く、夜の間パプロフの傍にいてあげて。それで様子がおかしかつたら私を呼んで」

「解りました」

と答えた。

昼間、彼女がパプロフの傍についている間に充電をすませた私は、彼女が眠りに行くのと入れ替わるような形で犬小屋の傍についた。

彼女がいなくなるやいなや、パプロフが

「ここに安楽死の薬があるなら、持つてきてはくれませんか」

倉庫のシステムに検索をかけた。

「持つてきて、どうするのですか？」

「なるべくこの場所から離れて死なせて欲しいのです。儂が死んだ場所は、彼女にとって悲しい場所になるでしょう、ですから彼女の滅多に訪れないであろう場所で死にたいのです」

「解りました」

私は一度地下へと降りて、プラスチックのチューブに入った

液体を持つて戻つて来た。

「それでは、まだ歩ける元気のある内に行きましょう」

パプロフはフラフラと立ち上がつて、右の後ろ足を引きずるように歩き出した。

ゆつくりと門を潜つて、どこまでも続く墓石広場へと踏み出していく。

「儂が彼女と初めて会つたのは、儂がまだ子犬の頃で、彼女の背丈が今の半分位の頃でしたな」

この犬は私の知らない彼女を知っているんだなと思つて、なにかモヤモヤとしたものを感じた。嫉妬というのだろうか。

「そんな小さな頃があつたんですね」

「そうですとも、儂なんか白い毛糸玉のようだと言われておつたくらいですから——」

それからパプロフは、思い出話をしながらゆつくりと歩いた。規則正しい墓石の林がどこまでも続くなか、老人の声で語られる彼女の姿は、段々と成長していく。

彼女は恵まれた家庭に生まれた。賢くて愛情に溢れ、信仰心と経済力も持ち合わせた両親に育てられた彼女は、少し気弱ながらも素直な女の子に育つていく。そんな中でパプロフはいつでも彼女のよい友達であり、兄弟であつた。彼女の投げたボールを持つて帰ってくるだけで彼女ははしゃいだ。彼女が両親に怒られて落ち込んでいる時に寄り添うと、彼女は寄りかかつたまま眠ってしまった。

時が経つにつれ彼女はよく勉強する子供になっていき、当然

の流れとして統一教の運営する中でも最も由緒正しい学校へ入った。それら全てがバプロフにとって誇らしいことではあつたものの、一緒にいられる時間の減っていくことが寂しくもあつた。日課の散歩はいつの間にか彼女の母親の仕事になって、バプロフは家族全員を好きだったがやはり一番気にかかるのは一緒に育つた彼女のことだったという。

そうして彼女は入学した学校でもいつの間にか首席の成績を上げていて、統一教の都市に「何か」があつたときに最期に祈りを捧げ続ける役割を与えられた。度重なる荒廃の中で切れ切れになつた宗教の断片をつなぎ合わせて復興したのが統一教であり、統一教の教義において祈りとは造物主との距離を縮める儀式である。五十億年を超える年月を祈り続けてようやくもたらされる救いの時であつて、生者と死者は隔てなく救われるのだという信仰が教義の中心にある。

「こんな所に永遠に近いような年月を閉じ込められて過ごすことは、きつと彼女にとって辛いことでしょう。それでも、僕には少し嬉しかったんです。あの子が他の全ての死の向こうに生きていることと、何よりもまた一緒にいられる時間の増えたことが」

そのようにして昔話を締めくくつたバプロフは、「さあ、そろそろこの辺でいいでしょう」と芝生の上に寝そべつて、浅く忙しい息を整える。「薬を飲ませてはくれませんか」「本当にいいのですか?」

「勿論、満足ですとも」

懐からプラスチックのチューブを取り出して、蓋を開けるとバプロフの口に少しづつ流し込んだ。

「その内に効いてくるはずですよ」

私は言った。

しばらく続いた沈黙をバプロフが破る。

「ああ、全身の痛みが引いてきたようですわ。お前さんには礼を言わなければ。しかしその前に、謝らなければいけないことがあるのです。実は最初に会つたときから、僕はお前さんのことが嫌いでした」

「薄々そんな気はしていましたよ」

「お前さんは僕がいなくなつた後も、ずっと長い間彼女の傍にいます。ずっと彼女を見守つてきた僕を差し置いて、機械人形があの子の行く末を見守つていくなど、どうして許せましようか。だからお前さんが彼女に少しでも嫌われればいいと、これが最期の復讐です。あの子の中でお前さんは、僕を遠くに連れ去つて殺した存在です」

「やつぱり、変なことを言い出すと思つていました。私がこんなことをしたのは、あなたが嫌いだからですよ。だってあなたは私の知らない彼女を知っている。どんなに長い時間を共に過ごしても過去は取り返せない、私がどうしても得られないものを持つているあなたが妬ましくてたまりません」

「そう言つてくださると、愛犬冥利につきますな」

老犬はノンビリと言つて、再び沈黙が降りる。

十分二十分と時間は過ぎて、なにやらおかしいと気付いた。バ

パプロフは口を開く。

「はて、死んだ後というのもこのようにして意識は残るものなのですかな」

「さっきのはただの鎮痛薬ですよ」

「これは一杯食わされましたなあ、いや、飲まされたのでしようか」

パプロフが愉快そうに言うので、私は少し悔しくなつて立ち上がる。

「さあ帰りますよ馬鹿犬、散々自慢話をして気持ちよくなって、挙げ句の果てには彼女の心に傷を残したまま自分だけ楽に死のうだなんて、私が許しません。彼女を傷つけていく分くらい、あなたにも苦しんでもらいます」

「はは、参りました」

パプロフは立ち上がつて、確乎とした足取りで教会を目指す。その夜無理をして歩いたせいから、パプロフの衰弱は早まった。

次の日の午後にはもう立てなくなつて、浅く早い呼吸を繰り返すようになる。彼女と私はそんな老犬の横にずっと付き添つた。彼女が少し席を外した際にパプロフは、

「死ぬというのは、苦しいことですか」

掠れた声で言う。

「当たり前です。命を繋ぐための、それは生き物の機能でしょう」
「なかなか厳しいことを仰いますな。しかしそれでも、僕は安心して死ぬそうです。あの子のことを頼みましたよ」

パプロフはそう言つて目を瞑ると、それっきり何も言わな

かった。

その日の夜中、パプロフは下痢をした。何も食べていないはずなのに、水っぽい便が老犬の体を汚した。すぐに拭き取ろうとする私を制止して彼女は、

「私に拭かせて」

と言つた。

老犬は間もなく冷たくなつた。

疲れが出たのだろう、パプロフを看取つた彼女は泣きながら寝入つてしまつた。彼女を寝床に運んでから一度、骸の元に戻つた。もう何を語りかけても彼の耳には届かないのだと考えて、もつと何か言うべき言葉があつたような気がした。世界の中にポツカリと、穴が空いているように感じられた。

「パプロフを埋めに行きましょう」

明くる朝彼女は言つた。

彼女は自分で抱えたがつたが、白熊のような老犬の体は彼女の臂力に対してどうしても大きすぎたので、私が抱えて行くことになつた。彼女は代わりに二本のシャベルを持つて、墓石広場を先導する。

「塀の外に出るのは、初めてここに来た日以来だわ。あの日はパプロフがなかなか見つからなくて、慌てたな」

その言葉を皮切りにして、彼女は明るい声でパプロフとの思い出を一つ一つ話していく。その中には一昨日の晩、パプロフから聞いた話があれば、聞いたことのない話もあった。同じ話

でも細部が違うと言うことがあって、一緒に遊んだ公園の遊具の数や、なくしたボールの色なんかが少しずつ違う。

彼女の思い出一つ一つに相づちを打つ内に、一昨日の晩、パプロフと休んだ場所まで辿り着いた。

「この辺りにませんか」

私は声をかけて、彼女は黙って頷く。

二人で黙々と地面を掘り下げて、充分な大きさまで穴を広げた。

青い毛布にくるまれたパプロフの骸を、彼女は一度だけ愛おしそうに撫でて、穴の底へは二人がかりで移した。

彼女が感情を爆発させたのは、パプロフをすっかり埋めてしまつて、

「帰りましょっか」

と声を掛けたときだった。

「ねえ、どうしてあなたはそんな風に平気な顔をしているの？」

彼女の顔がくしゃくしゃに歪む。

「パプロフは死んでしまつたわ、キイだっていつかは死んでしまう。ねえ、あなたが私と一緒に泣いてくれないのなら、私はずっと独りぼっちになつてしまふ」

「私も悲しんでいますよ。ただ、泣くという機能がないだけで、私は——」

歩み寄ろうとする私に彼女は縋るように抱きついて、

「ねえ、私はあなたが機械人形だつて知っているのよ。知っているのに、あなたに縋ってしまうの。心のない優しい言葉に」

「私は…… 確かに私には、表情も涙もありませんが、心はあります。私はパプロフの死が悲しい。パプロフの死を悲しむあなたを見ていることがとても辛い。どれも本当のことです」

「そつよね、あなたはそういう言葉を喋るように出来ているの。でも嘘よ、だつてこんなに耳を近づけても心臓の音が聞こえないんだもの。だからお願い、黙つて話を聞いて。ねえ、パプロフはずつと私と一緒にいたのよ、パプロフは先週までご飯を催促しに来たのよ、パプロフは昨日まで息をしていたのよ、あんなに温かかったの、パプロフは温かかったのに——」

言葉の最後は嗚咽に飲まれて、彼女は泣き続けた。

A3 墓

眠り込んだトイを置いたまま、私はいつかパプロフを埋めた地面の前まで来ていた。芝生がそこだけポツカリとなくなつていて、茶色い土が顔を見せている。

「こんなところまで来てどうしたの？ あなたも彼女も、犬を埋めたあの日以来、この場所には来ていないのに」

いつの間に先回りしたのだろうか、目の前にある墓石の裏からトイが姿を現した。

「あの日以来来ていないから、来たのよ。彼女が死んだのはきつとこの場所」

私は答えて、掌に握つたカプセルを見る。

「ねえ、人間だつた彼女が造物主に祈るなら、私は何に祈れば

よかったの？ 私の造物主はこの誰とも解らない、既に死んでしまった人間だった。ねえ、私の造物主はどうして心を与えたの？ そんなものがあつたところで、辛かったり苦しかったりするばかり。どんなに息の詰まるような思いをしていても、それを伝えることすら満足に出来ないのなら、私は彼女の言う様なただの機械でありたかった。単純な反射で生きている昆虫のように、機械的に優しい言葉を吐く電気仕掛けではいけないかったの？」

「あなたに心があるかどうかなんてどうでもいいわ。あなたは今もそんな風にして心があるかのような台詞を喋る機械かもしれないし、或いは本当に心があるのかもしれない。言葉を持たない動物にも人間は心を見いだすのだから、心の存在に言葉は必要ないのかもしれない。言葉を生む仕組みには必然的に心が宿る、そういうことがありえないという証明もまたできない。

どちらにしても、大事なのはあなたの造物主は失敗したと言っただけ。心があつたのだとしてその心は彼女を殺すことに繋がって、心がないのだとして彼女を殺してしまったのは本来の機能から逸脱したエラーと言うことになる。心かエラーか、つける名前が異なるだけで、起こってしまったことは変わらない」

「彼女を殺したのは私じゃないわ」

「いいえ、だってこんなことが出来るのはあんたしかいないもの」

トイは尻尾をパタリと振って、口元をチェシャ猫のように歪

めて笑った。

「或いは、本当に彼女を殺したのはあんたじゃないかもしれないわね。例えばあなたの造物主に悪意があつたのだとして、最初から彼女を殺すための機械としてあんたを作ったのなら、それは成功したと言うことになるわ。その場合、殺人の実行犯はあんたという道具を作って用いた人間ってことになって、あなたの存在は銃やナイフと大して変わらないものだってことになる」

「そんな、そんなはずはない！」

私は知らず、激昂していた。私の過去や記憶や、抱えてきた思いの全てが他の誰かのものにされてしまうことは、とても耐えがたいことだと思った。

「怒鳴らないでよ、猫は大声が嫌いなんだから」

風が一陣通り過ぎて、私は頭上の月を見上げる。人面はいつの間にか消えて、まっさらな月がまるで白い穴のように作り物の夜空を穿っていた。

「……いいわ、最後の思い出話をしましょう。それで全部がハッキリするはずよ」

B3 死ぬ

パブロフが死んで一週間が経ち、彼女は地下に案内して欲しいと言いだした。倉庫のある地下二階、その下に降りる階段の先、最初の日に彼女が拒んだ部屋に彼女自らが行きたいと言う。

その部屋に案内するのが私本来の役割であり、その部屋が果たす役割はこのシエルター本来の機能を完全な形で実現させることであるはずだった。

「本当に宜しいのですか？ これはそんなに急いで行わなければいけないことではないはずですよ。あと十年、いや五十年先だつて間に合はずです」

引き留めるような言葉が口から出てきたときは驚いた。

「いいのよ、十年先延ばしにしたところで、その十年に何があるわけでもないわ。誰もここには訪れないのだから。こんな辛い時間は終わりにしましょう」

「しかし、私は……」

「あなたが案内してくれないなら、私が一人で行くわ」

そう言つて彼女は強引に歩き出すので、私は後からついていくより他なかった。もつと強く引き留めておけばよかった、これは後から考えたことだ。彼女はパプロフの死で動揺していただけかもしれないのに、一時の感情の嵐を乗り切ればあんな風に早まらなかつたかもしれない。

倉庫の先、階段を降りると二重になったエアロックが存在していた。彼女は迷ふことなく一つ目のエアロックを開けて入つていく。扉が目の前で閉まつて彼女の姿は見えなくなる。

一つ目のエアロックで彼女は服を脱ぎ、二つ目のエアロックで体を洗浄される。その先には無人の手術室があった。

人口の維持が不可能になつてから先、統一教には祈りを捧げ続けて造物主を近づける人物が必要だった。そして、それに必

要な膨大な時間を過ごすのに人間の体はあまりに儂い。この部屋は十回に分けて彼女の体を少しずつ機械に置き換えて、やがて訪れる救済の時を待つ体を与える部屋だった。

多細胞生物の体は常に新しい細胞に置き換えられる。代謝によつて構成物質は入れ替わりを続け、人体を構成する分子は二年ほどで全て入れ替わるとも言われる。それならば、体を構成する要素を少しずつ置き換えて、それが機械だつたとしてどこに問題があるのか、というのが統一教の中でこのシエルターを作つた一派の主張だった。

人間の自己同一性は心によつて保持される。そして彼らは、人間の心は超越者によつて作られた被造物であり、根本的には物質から生じるものではないと考えていた。脳によつて心が生じているのではなく、心によつて脳が駆動しているのだ、と考へていたのだ。それはつまり、脳を少しずつ半導体の塊に置き換えて機械化していつても、心そのものは保持されるという信念である。ただ、心が駆動する対象が脳の灰白質から集積回路に変わるだけということ。

人間を少しずつ機械に変えて、それが一方の極限に到達した先で祈るための何かが完成する。それは機械のように不滅の体へ人間の心を抱えて、永劫に近い時を祈るための時計仕掛けとなる。

そんな一連の理屈を反芻しながら私は奇妙な胸騒ぎを覚えていた。

いつまで経つても開かないエアロックを眺めながら、やつぱ

り待つことは苦手だと思った。施設のシステムは無事に手術が行われつつあることを知らせてはいたけれど、直接彼女の姿を見て、彼女の言葉を聞きたかった。体の置き換えですむ手術ならまだしも、一連の施術には脳の置換や循環器系の置換すら含まれるのだ。

とても長い六時間が経過した後、生気のない顔をした彼女が姿を現した。フラフラと歩み寄ってきたところを私が抱き留める。

「ごめんなさい、ちょっと立っているのが辛い。寝室まで連れて行ってくれる？」

「無理ありませんよ、これはとても強引な手術ですから」

私は彼女を横抱きに抱えて階段を昇る。両腕の中に彼女の細い体と、確かな質量と、体温を感じる。こういう抱え方をお姫様だつと呼ぶのだと思い出して、胸の裡でこつそりと「私のお姫様」と呼んでみる。とてもむずがゆいような気分になって、足が地に着かないような、世界が熱を持ったような気分になった。

彼女をベッドに寝かせて、手術の経過を確かめる。最初の手術は右腕と脳幹の一部を置換するだけですんでいるようだった。

「少し、変な話してもよいですか？」

彼女は目を瞑ったまま、

「どんな話？」

「最初の手術で置き換える範囲が、思ったよりも小さくて安心

しているんです」

「それは変な話ね。だって、この場所は私が全て機械になるまで完成しないのに」

「手を握っていてもいいですか？」

彼女は無言で左腕を布団の上に出した。血の通った温かい手。

その夜から私は、墓石広場に出ることをやめて、彼女の傍でじっと朝を待つようになった。

表向きは何も変わらない日常が過ぎていく。日に二度の食事と、三度の祈り。合間に挟まる会話。彼女の食べる量だけが、生体部分の減少に伴って少なくなっていく。それから、睡眠中に充電を行うようにもなった。

右腕の次は左腕、左腕が終わったら右足。四肢を置き換えたら次は内分泌系や神経系。少しずつ彼女の肌は無機質なセラミック外殻に置き換えられていき、手術の度に脳もまた少しずつ、内側から外側の大脳辺縁系に向けてケイ素質へと置き換えられていく。

それに伴って彼女の人間味とでも言うべきものも、また少しずつ失われていった。

最初に気が付いたのは間違いなく猫のキイだ。

「あんた達、最近変よ。なんかいろいろとあべこべで気持ち悪いわ」

そう言って食事の時間以外、全く姿を現さなくなった。そうなってしまつて初めて、それまでは一日の内に何度か、視界の

隅をキイは横切っていたのだと気が付いた。素っ気ないようにいて、意外と近くにキイはいたのかも。

三回目の手術が終わった頃合い、そんな話を彼女にしてみたところ、

「そのうちにまた、慣れるでしょう」

素っ気ない返事がきた。

「そうですね、キイがいないと少し寂しいです」

「そのうちに慣れるわ」

彼女が無表情に言うので、私は虚を突かれたように思った。

「どういう意味ですか？」

「さあ、そろそろ祈りの時間よ」

彼女はクルリと踵を返して教会に向かつてしまった。釈然としない気持ちのまま私はその場に取り残された。

その時こそ何か一時の機嫌の問題だと思つてやり過ぎたものの、異変は続いた。

まずは一回あたりの祈りの時間が増えた。それから食事感想を述べなくなった、ただ機械的に咀嚼しては飲み込む。まるで作業のようにして日々の食事を終える。映画を見なくなった、小説を読まなくなった。表情が減った。

「偶にはあの映画を見ませんか？」

彼女に言つてみたところ、

「どの映画？」

「あの笑う月が出てくる映画です」

「見たければ見てもいいわよ、私は祈りの日課をこなしてくる

わ」

「時間にはまだ早いのでは」

そういう私を置いて彼女は一人、行ってしまった。

言われたとおり、一人で映画を見てみた。夢見るように眺めていたはずのあの月が、どうしてかとても白々しく見えてしまった。全ての映像が心の表面を、どこにも引っかからずに滑り落ちていくようだった。画面の中ではパレードが、無音の乱痴気騒ぎを繰り返している。

六回目の手術を越える頃には、疑念は確信に変わっていた。彼女は少しずつ、人間でなくなりつつある。

「あなたが段々と、掌からこぼれ落ちていくように感じるんです。砂時計の中を落ちていく砂のように、取り返しのつかない形でほろほろと崩れて、指の隙間をすり抜けていくんです」

教会の中、説教台の奥、統一教のシンボルが象られたステンドグラスの前で彼女に言った。

「変なことを言うのね。私はここにいるわ」

機械の両手を組んで、セラミックの膝を床についた彼女は機械化された声帯で答える。

顔の大部分も置換されていて、残っている左目だけがしっかりと光っている。

「私はあなたが好きです」

「そうでしょうね」

「あなたのころころと変わる表情が好きでした。色とりどりの言葉が好きでした。そういうものがあなたなのだと思つて

います。あなたは段々と表情や言葉を失って、そうしてあなたではなくなっていくような気がするのです」

「心も表情もない機械のあなたがそんなことを言うの？」

彼女は祈りの姿勢を崩して私の方を見る。右目の位置にあるカメラと、未だ光を失わない左目が私の両目をじっと見つめる。

「これ以上、手術を進めるのは止めませんか？ このままではあなたがすっかりあなたでなくなってしまう」

「私はどこまでいつても私のままよ」

「それは違います。人間の同一性は心によって保持されます。その心が失われてしまうなら、それはもうあなたではない」

「それは違うわ、ナナ。人間の同一性を保持するのは記憶の連続性よ。心は常に移ろうの。どんな感情もいずれは風化する。大事なものをなくした思い出は、一年も経つ頃にはもう耐えがたいほどの悲しみを背負ってはいない。幼い頃に信じたおとぎ話に、あの頃のような気持ちで入り込むことはもうできない。

そんな風にして私たちは色々なものの感じ方を失っていくの。それは成長と呼ぶのかもしれないし、老化と呼ぶのかもしれない。どちらにしても、人間の心は変わるわ。

それでも記憶は残るの。私は畏れた、恐れた、味わった、触れた、見た、耳にした、泣き叫んだ。そうして最後に祈りを得て、祈りと記憶だけが手元に残った、私は人間よ。かつて人間であり、今も人間で、これからもずっと人間。それだけのこと。

ナナ、あなたははどう？ あなたは最初から機械で、人だったことなんてないでしょう」

「祈りなんか以外にも大切なものがあるはずですよ。思い出なんかだけでなく、手元に残せるものがあるはずですよ」

「それなら一体、何が残せるって言うのよ！」

彼女は突然激昂した。機械の声にノイズを混ぜながら彼女は言う。

「もうこの先には何も無いのよ。この場所には誰も来ない。パブロフは死んでしまった。キイだってもういつまで保つか解らない。全てがとつくとどうに手遅れなの。祈る以外に何かあるって言うの？ 何もかも失った人間が信仰に縋って、何がいけないというの？ 心なんかあったって辛いだけ、私は早く祈るためだけの機械になつてしまいたい」

彼女の左目から涙が一筋流れる。ステンドグラスから差し込む日光に煌めいて落ちる。その雫を拭き取ろうと伸ばした私の手を彼女は払いのけた。

「心のない機械が、知ったような口を聞かないで」

「どうして解ってくれないんですか？ 私にだって心があるんです。あなたを失うことがどうしても怖いんです」

彼女は何も答えずに踵を返して、教会から出て行った。

それから彼女は何も言わなくなった。

無言で日課の祈りを繰り返す、その合間には何も無い虚空の一点を見つめて過ごす。その後を私はずっとついて回り、時折話しかけもしたけれど彼女がこちらを見ることはなく、そうかといって追い払うようなそぶりすら見せてはくれなかった。まるで空気のように私は扱われた。じりじりと焼け付くような時

間を、私は何もできないまま見送った。

次の手術で彼女は左目を失って、すっかり能面のような顔に置き換えられてしまった。大脳の置換も殆ど終わり、彼女はすっかり人間味を失ってしまった。毎日を決まり切った時間に決まり切った動きで過ごしていくようになる。

九回目の手術が終わるのを待っているときだった。今までは一度も地下に降りてきたことのないキイが、エアロック前に座り込んでいる私の前にやってきた。

キイは満月のような黄色い目でこちらをじっと見つめると、
「ちよつと言い忘れていたことがあってね」

「どうしたんですか、珍しくしおらしい声なんて出して」

「あたしは、あなたのこと嫌いじゃないわよ。それだけ」

一言言って、階段を駆け上っていこうとする。途中で一度振り返って、

「あの子にも、もし機会があったら一言伝えておいて」

言い残すなり姿を消してしまった。

しばらく経ってエアロックから、心臓以外全ての部分を機械に置き換えた彼女が出てきた。

それからキイは、食事の時間にも姿を見せなくなった。

3日ほど経って気が気でなくなった私が探しに行く頃には、とうに冷たくなった黒猫の骸が墓石広場のなかにぼつんと転がっているだけだった。

私は膝を折って、キイの体を抱えた。驚くほど軽かった。こ

の子はもう、憎まれ口の一つも叩いてくれない。体にうまいこ
と力が入らなかつた。こんなとき人間なら、悲しみを涙に変え
て流してしまえるのだろうか。そうしてしまえたのなら、少し
は楽になれるのだろうか。

私は教会にキイを連れて帰った。

「キイが死んでいました」

そう伝えても彼女は祈りの姿勢を崩さなかつた。

「そうですか」

一言、素つ気ない返事をして無言の祈りを続ける。

「何も感じませんか？」

「キイの死は、悼むべきことではありますが、嘆くべきことでは
ありませんよ。これから永い時の果てに、救いの時がありま
す。その時、キイもパブプロフも、この場所に名前を刻まれた全
ての人々も分け隔てなく救われるはずですから」

波一つ立たない水面のように静かなその声を聞いて、私は絶
望した。もはや、私の愛した彼女はどこにもいなくて、キイ
もいない今、独りぼっちになってしまった。

私はキイの体をベンチに横たえて、説教台で祈っている彼女
の背中に歩み寄った。

「あなたは、悲しくありませんね？」

「悲しむことはありませんよ」

再度の確認にも、私の願った答えは返ってこなかつた。

「悲しみというのは、そんなものではなかつたはずでしょう？
感情というのはただどうしようもなく溢れてくるものだったは

「ずでしよう？ 悲しむべきだから『悲しい』と言葉にするのではなくて、キイが黒い猫だったから、キイが生きていたから、そうして二度と会えないから、そういったこと全てから抑えようもなく零れてくるものだったはずではないんですか？」

「ナナ、私にはあなたの言っていることがよく解らないわ」

「どうしてそんな簡単なことも解らなくなってしまったんですか」

「私は彼女の横に立って、両肩を挿んで床に押し倒した。ギイギイと音を立てながらセラミックの腕が抵抗を試みる。モーターの出力は私の方が上回っているようで、彼女の抵抗は徒勞に終わる。」

「やめなさい、ナナ」

「制止する声にはどんな感情も乗っておらず、ただ澄み切っていた。」

「私にはあなたしかいないんです。そのあなたが私と一緒に悲しんでくれないのなら、私は永遠に独りぼっちになってしまいます。いいえ、もうなってしまったんです。あなたは神経をワイヤーに置き換え、骨は鉄と化し、血の代わりにグリスを満たして、心を失ってしまった」

「私は抵抗を続ける彼女の腕を引きちぎった。断面から赤色や青色の導線がはみ出して、火花を散らす。続いて両足を引きちぎる、黒い潤滑油が流れ出す。」

「腕や足をどんなにバラしても、その全てが機械で、彼女の痕跡が見つからない。」

「どうしてこんな風になるまで、あなたは進んでしまったのですか？」

「やめなさい、やめなさい、ナナ」

「胴体と首だけになった彼女を私は抱き起こした。」

「ナナ、やめなさい」

「彼女は機械的にその言葉ばかりを繰り返す。」

「もっと早くに、あなたがあなたである内に、こうするべきでした。いつの間に、何がどうなったのかすら解らないやり方で、心のない機械の手術室にあなたを奪われてしまうくらいなら、いつそ私の手でこんな風に、私のものにしてしまえばいい」

「やめなさい、やめなさい」

「セラミックに覆われた彼女の胸郭を、無理矢理こじ開けた。」

「どうしてあなたは私を置いて行ってしまったのですか、私は——」

「金属と配線ばかりが無機質に光る胴体の中に、最後に一点残された赤い心臓が脈を打っていた。硝子のカプセルに閉じ込められて、弱々しく脈を打っている。そのつるりとしたカプセルに指を這わせて抜き取った。ブツリと音を立てて、繋がっている配線が何本か千切れる、何かの液体が流れ出す。」

「やめなさい、やめ——」

「なおも喚き続ける頭部を胴体から引きちぎって叩きつぶすと、ようやく辺りは静かになった。」

「どれほど時間が経っただろう。偽物の月明かりが全てを蒼白

く照らしていた。

静けさが世界に満ちて、とうとう私はどこにもいけないところまで来てしまった。

掌で徐々に脈拍を失っていく、心臓を見つめて、私は未来を恐れた。

「この何もない場所で、ずっと過ごさなければいけない。そんな果てのない時間は耐えられそうになかった。私は私を終わらせる方法を探した。

終わらせてくれる誰かが必要だった。私は両目のカメラに繋がった回線を遮断して、自らのプログラムを一部分離した。分離した私の良心とでもいうべき何かに、キイの記憶を混ぜ合わせて一つの擬似人格を削り上げて、記憶を頼りに、認識プログラム内部に形成した箱庭の中に配置する。

私の内側にもう一つの教会が構成されて、外部情報を遮断した私には現実と見分けがつかなくなる。人間で言うところの夢を見ている状態がそれにあたるのかもしれない。

私の夢の中で、トイという名前を得た、私だった何かが私を責め立てる。

荒れ放題に荒れた教会の庭先で、小さな裁判が始まる。

A4 信仰

黒猫のトイは

「それ見なさい」

と勝ち誇る。

「やっぱり彼女を殺したのはあんただだった訳だ。そうして私はあんたを壊すための存在、さあ自らの罪を白状しなさい」

いつの間にか夜が明け始めて、墓石の上に立ったトイの姿は朝陽を背にして影絵になる。ずらり並んだ墓石全てがクツキリとした輪郭を得る。

「私は機械を壊しただけよ、人間を殺した訳じゃない」

「あなたも大概、強情ね。いいわ、最初の質問に帰りましょう。あんたはどうして彼女を壊したの？」

「どうして——」

「そう、どうして。だって彼女は最早ただの機械だったんでしょ、それならもう何をする意味もなかったはず。彼女の体が壊れていようがいまいが、どちらにせよ彼女はそこにいなかったんだから。あなたはただ用済みになった自分をダストシユートにでも投げ込んでしまえばそれでよかったですよ」

差し込んだ朝陽に手元が照らされる。赤々と脈打つ小さな心臓、彼女の最期の部分がある。私を突き動かしたあの激しい情動の正体は、気が付いてしまえばあつけなく、掌に握られていた。

心を決めて私は言った。

「彼女にまだ心臓があつたからよ」

トイは満足げにたたずまいを直した。

「やつと罪を認めた」

そう、その通り。私は自分で言っていた。

『いつそ私の手でこんな風に、私のものにしてしまわうべきでした』

[FOF]

トイが泣き笑いのような声で言う。

「そこまでして手に入れた物が、こんなちっぽけな心臓一つ。笑えるわね」

顔を上げてトイの目を見る。

「それでも私は、ここにはまだ何かがあると信じたかったの。心がどうしても目に見えないのなら、この心臓にあると信じていたっていいでしょう？」

両頬を温かい液体が流れ落ちる。夢の中なら私にも涙を流す権利がある。

「そう、あなたは心をもった彼女を殺したの。さあ、これであんなにも私も暗れて人殺し。判決の時間よ」

トイが私の中で自己消去プログラムを開始した。

世界が端の方から解けて消えていく。真っ白い虚空がまばゆいばかりに多くの墓石を、教会の建物を、トイを全ての記憶を呑み込んで追り来る、私が段々消えていく。

あの犬の名前をもう思い出せない。あの猫の名前を忘れてしまった。彼女の名前を、あの激しい感情の名前を思い出せない。最後に胸元に抱えた温かい何かの感触だけが残っていて、それがどうしようもなく大切なものであるということだけが解った。

脈打つそれをそっと抱き寄せて、その温度さえもやがては消えていく。